Architectural Institute of Japan

5075

日本建築学会大会学術講演梗概集
（中　国）　1990 年 10 月

史的回想法による住生活史研究（その5）

――体験記述における父母の像とすまい――

正会員○　在　塚　礼　子

1．研究の目的と方法

本研究は“開放的な伝統的住空間での柔軟な住み方”に焦点をあてて住生活を見直し、家族の器としての住居のあり方を考察することに加えて、過去の住生活を把握する方法として用いている史的回想法によって、“記憶の中のすまい”の意味を探ることも目的としている。

本報告では、従来の（調査A）によって、高齢となってから思い浮かべる父母の姿がどのようなものであるかを捉えた上で、体験記述（調査B）における父母に関する記述をとりあげて、描かれる父母の姿に見る過去の住生活について考察したい。（調査B）では、より新しい時代の父母の像とともに、すまいづくりや住み方に対する父母の関わり方を通して、そのような住生活を実現した規範や憧れが捉えられる。

2．考察の前提

・“最も好きだったへや”は、いつも誰かがそこにいたことなど、家族との交流の場であることを理由とするものが多い。〔報1〕

・しかし、私室の確立をはじめとする住空間の変化によって中心的なへやから人がいなくなり、住居の中心性が弱まる傾向にある。〔報2〕

・過去の定型化された住空間においては安定した座を持っていた家族生活の中心となるへやが、そのような明確な個人の座を持たない“公室”に変化する中で、さらにこの傾向は強まっているのではないかと見られる。

・家族生活の中心となるへやに、家族がいることがイメージされることには意味があると考える。

・家族生活の中心のへやに、個人にとって居心地のよい場（個人領域の核となる座）を主体的にしつらえることが必要であると考える。〔報4〕

・体験記述の方法は、住み手の主体的なすまいへの関わりを見るのに適している。〔報3〕

調査A：全国から入学者の集まる東京の大学学生を調査員とし、身近な高齢者を対象に選んだ子ども時代（対象者が10～12歳をめやすに特定）の住居と住生活に関する面接調査。対象年代を昭和19年までに限り、各項目に矛盾がなく、各家族員の就寝室が明確なことを条件に、220 例を抽出（抽出率約60%）。農家が半数、三世代家族が半数、対象年代は昭和以前が半数、建築年代は江戸から昭和にわたるが明治が最多、持家が9割近い。（報1・報2参照）

調査B：居住者としての生活体験を住宅計画の研究者自らが記述したもの。これは、筆者もその一員であるハウジング・スタディ・グループ（代表　鈴木成文）による研究「「型」の崩壊と生成――体験記述にもとづく日本住居現代史と住居論」（1990・住宅総合研究財団）におけるものである。18人（年令は60代から20代にわたるが40代に集中）によって42の住居における体験を記述。この内、記述者が子どもの立場である21の記述を考察の対象とする。21例中9例は三世代同居の時期を含む。農家はなく、体験記述年代は昭和初期から現在まで。

表：“父（または母）”というと、どういう姿（どこで何をしている姿）を思いうかべますか。（調査A）

	農家	自営		勤務
		併用住宅	専用住宅	
＜父の姿＞				
“家族生活の中心のへや”	8〔読書／喫煙／新聞	2〔火鉢の前で文句	4〔喫煙／お茶／休養	9〔和服／たばこ/ラジオ
“父のへや”	6〔帳簿／書き物／	7〔仕事／	11〔読書／仕事／	17〔読書／碁／詩吟
畑仕事／店で仕事／その他	95〔農作業養蚕／	34〔仕事／接客／	21〔仕事／長火鉢の前	29〔園芸／出勤／尺八
＜母の姿＞				
“家族生活の中心のへや”	11〔針仕事	4〔針仕事ち	11〔針仕事	7〔針仕事
“母のへや”	4〔針仕事	0	3〔針仕事	10〔針仕事
畑や店での仕事／台所／他	86〔農作業炊事／織物	37〔仕事／炊事／配達	18〔炊事／洗濯／応接	〔炊事／洗濯／世話
計	101	41	32	46

＊“家族生活の中心のへや”などは被調査者がそう認識したへや

〔報1〕史的回想法による住生活史研究（その1）戦前の家族とすまい　（'84 関東支部研究報告集 NO.19）
〔報2〕同上（その2）家族領域と個人領域　（'84 大会梗概集 NO.5032）
〔報3〕同上（その3）ある中廊下型住宅に関する考察　（'88 大会梗概集 NO.5077）
〔報4〕住生活の主体的形成に関する考察　（'89 大会梗概集 NO.5033）

A study of dwelling use by retrospective history-taking (part 5)　5075

――Notes on formation of dwelling by parents and their image

Arizuka Reiko

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

3．結果（1）――父母の像と“中心のへや”

1）高齢者による農家や自営の父の像は、専ら仕事をしている姿で思いおこされるので、“家族生活の中心のへや”にいる姿は僅かに農家に数例、喫煙しつつ火鉢の横で寛ぐ姿として示される。

2）勤務の父親については“父のへや”である座敷や書斎で読書や書き物をしている和服姿が多く挙げられる。“中心のへや”での和服で寛ぐ姿の他は、背広を着た出勤時や帰宅時の姿が挙げられる特徴がある。

3）母の像もそのほとんどが家事をしている姿であり、“いつもいる”“母のへや”と意識されていることの多い“中心のへや”〔報2〕も、針仕事をしている姿の背景としてのみ示される。

4．結果（2）――体験記述における父母の像

1）三世代同居の時期を含む居住体験では、父母よりも圧倒的に祖父母の姿が記述される。それは、茶の間や居間にいつもいる姿、そこでの客との応対の姿、宗教的な日課や行事に携わる姿、孫の世話をする姿として描かれる。①②③

2）設計においても住み方においても、父が主導権を発揮する様子が描かれていることがほとんどである。（伝統住居の意匠、商品化住宅に対する注文、決してこたつでは食事させないことなど。）その多くの父については、みずから座をしつらえる様子も描かれる。④⑤⑧⑨

3）かつては座敷や書斎にいる姿があげられた勤務の父親の姿も、子供たちが遊ぶ様子を見守っているなど、茶の間などでの姿が多くなり、近年では居間で家族にサービスする父の姿も描かれている。④⑤⑥⑦⑧

4）祖父母から父母への世代交代時の、住様式の変化や世帯分離などに関する葛藤も描かれる。⑨⑩

5）母親が描かれることは少ないが、台所やＤＫへの改造は母の意見によるというものが多い。そこを母の領域と意識することと関係していよう。

5・考察

かつて住み方は（伝統的な規範も本人に同化して）祖父母や父母によってはっきりとした意志として示された。その後の新しいスタイルについては、順応する時期を経て、住みこなす段階にある。人の姿や立居振る舞いを想定したすまいづくりがさらに求められる。

＊①⑧⑩20代・②③④⑥⑦40代・⑤30代による記述

① カッテには堀ごたつがあり，そこでの座は固定していた。祖父は縁側に近いところ，祖母はダイドコロに近いところ，客はナカノマに近いところである。テレビは祖父の正面にあったので，客は振り返って見ていた。接客もお茶も食事も日中の生活はほとんどがこの部屋で行われており，その他の部屋が使われることはなかった。

② 夜の便所には必ず祖母に付いてきてもらう。電灯がなかったのか，あるいは切れていたのか，しゃがみながら，「おばんちゃいる？」としょっ中声をかけながら，もちろん開けたままの便所の入口から，祖母が手に持った火のついた薪木を見た記憶が残っている。

③ よくこたつで勉強した。すると，私がやっている旅人算や鶴亀算を，祖母もこたつの向こうで面白がって解いたりした。母がこたつに入ることはあまりなかった。

④ 茶の間におけるそれぞれの居場所は概ね決まっていた。父は出窓の入り隅側をなわばりにしていた。出窓下の棚には父専用の菓子箱が入っていた。父は食後，おもむろに菓子箱をとり出し，子供たちに少しずつ分け与え，一緒に食べることを楽しみにしていたようである。

⑤ 父はこの部屋が気に入っていたようだ。特に冬は，親戚の人と一緒に，時々イロリを囲んで酒を飲んでいた。父の背（台所側）には古い茶箪笥を置き，また脇には小さな台を町の骨董屋から手に入れる等，場の雰囲気づくりを楽しんでいたようである。

⑥ 子供達の花火を，浴衣を着た母親が濡れ縁にいて，父親がトリスを飲みながら茶の間から見ていた。

⑦ 「ＤＫ」のテーブルは朝食や父親の帰りの遅いときの我々の夕食の場ではあったが，家族揃っての夕食や冬の食事には，隣の6畳を使うことが多かった。身体の大きな父が，狭い「ＤＫ」の椅子に座っている姿はいかにも窮屈そうだったのを覚えている。

⑧ 我が家では日曜日の朝食の後，父がコーヒーを入れてくれる。子供達と母が居間で待っていると，父が「入ったぞう！」と大きな声を出しながら，居間にコーヒーを運んでくれる。一家団らんである。たいていの場合，父はスプーンを忘れたり，ミルクを忘れたりするから，結局母や子供達は居間と食堂をいったり来たりすることになる。結構面倒ではあるが，やはりコーヒーを飲むなら食堂よりも居間がいいと皆思っている。南向きの部屋は気持ちがいい。そこで話をしたり，音楽を聞いたり，テレビを見たりしながらくつろぐのである。

父だけにはテレビの横に定位置があり，その他の場所に座ることはまったくない。面白いテレビ番組があるときにはソファの向きを変えて，テレビ画面と向かい合ってしまう。

⑨ その時期には，復員した父の意見により，直系家族とその他の家族が生計分離し，食事室とトイレを別にして生活した 。それを 祖母は嘆いたという。

⑩ 昭和52年，祖父の反対を押し切るような形で，台所と浴室の増改築を行った。

（埼玉大学助教授・工博）

NII-Electronic Library Service